

現代チベットの牧畜社会を対象とした 「家畜慣行の60年史」作成

別所裕介

広島大学大学院国際協力研究科 助教

緒言：問題の所在

中国では現在、黄河や長江をはじめとする大河川の水源地を保全するために都市部へ移住させたチベット牧畜民の生活支援策が膨大な予算規模で施行されているにもかかわらず、現地では期待された効果が上がらないばかりか、就業困難や都市生活への不適應に由来する鬱積したストレスが社会不安の増大を招いており、抜本的な対策の立案が急務となっている。こうした中、中国の学界においても、当初優勢だった牧畜民に対する一元的な同化政策論が影をひそめるとともに、“牧畜民”と“家畜”とが切り離せない関係にあることを前提として、移住後の彼らに家畜との部分的な共存手段を用意することの有用性が指摘されている¹⁾。だが、それらの研究は家畜の物質的・経済的側面のみ注意を向けており、宗教文化的側面において牧畜民が家畜との間に築いてきた精神的な関係のあり方については触れられていない。

これについて筆者は、これまで行った現地調査の中で、1951年の中国共産党によるチベット併合以降、人民公社による集団化期を経て市場経済開放に至る今日まで、現地の牧畜民の間に、家畜を基軸とした儀礼や禁忌、文化的規範といった民俗的慣習が、時と場合に応じてその外面的形式を変化させながらも、一定の強度をもって継続してきたことを、村の年寄りたちとの会話から聞き知ることができた。このことは、牧畜民が家畜を介して確立する象徴的な価値の体系が、半世紀に及ぶ中国の政治的変節の中でも強靱に保持されてきたことを意味しており、中国においてこの半世紀間が、個人の家畜所有をめぐる極端な共有制と市場経済的私有制の大幅な振幅を経験してきたことをふまえれば、その中で家畜をめぐる慣習的象徴体系が一定の文脈上の整合性をもって連続してきたという事実は特筆するに値する。

このことを、今日の環境政策によって長期間草原から切り離され、都市部近郊での定住を余儀なくされる牧畜民の内面的心境に立って考えるならば、経済動物とし

ての家畜そのものに付随する乳・肉・毛・皮・糞といった畜産資源のサポートを限定的に行ってとすることは不十分である。草原への帰還がいつになるかわからない不安状況に伴うストレスや、政府当局への不満の鬱積がもたらす社会的リスクを鑑みれば²⁾、今後の生活支援の立案には、牧畜民が長期にわたって培ってきた家畜との精神的・象徴的なつながりにまで配慮した、人間-家畜関係の包括的な理解の視点が不可欠である。またこのことは、国家によるさらなる生活支援の拡充、もしくは草原環境の回復に伴う牧畜セクターの再構築、という今後予想される複数の方向性をめぐって、牧畜民自身がより高い主体性を保持したコミュニティ運営を維持していくために重要な視点を提供しうる。

このため本研究では、中国に併合されて60余年が経過した社会状況のもとで、今日のチベット牧畜社会における家畜と人間との象徴的な関係を、特定の家畜慣行をめぐる持続性という一定の視角から示すことで、従来物質的な側面に終始してきた牧畜民への生活支援をめぐる枠組み上の問題に対処するための方策を提示したい。

研究の対象と方法

本研究では、上記の課題認識に基づき、黄河源流域の牧畜コミュニティにおいて普遍的に観察される家畜慣行である「ツェタル (tshe thar)」を取り上げ、青海省ゴロク・チベット族自治州の牧畜集落であるC村³⁾に住み込んで、戸別調査による聞き取りと家畜慣行の参与観察を行った。ツェタルとはチベット語で「(生き物の)命を解き放つ」という意味で、土着の精霊や神仏を対象とした供養物として畜群の中から選ばれ、耳に穴を穿って聖別される。この儀礼を経た後は、去勢→交配→剪毛→屠殺→出産という年間のルーティンから切り離され、自然死するまで迫害されることなく群れの中で過ごす。その実践の動機は子授け、病気直し、服喪、安産祈願、巡礼中の積徳など、牧畜民が経験する人生儀礼の幅広い

領域に関わっており、その実像は家畜を介した一種の通過儀礼の意味合いを持っている。

本研究では、現在の牧畜コミュニティにおいて日常的に実践されるこうしたツェタル慣行の通時性と共時性の双方を把握するため、夏期と冬季の二回の現地調査を遂行し、次の2点について集約的なフィールド資料の収集を進めた。

A. 調査村の70歳以上の高齢者を戸別訪問して聞き取りを行い、1950年代から今日までのツェタル慣行の実践上の形式変動とその持続性の質について検討する。

B. 個別世帯の所有家畜におけるツェタルの割合と実践動機についてデータを収集し、市場経済下でのツェタル慣行の変動とその背景を考察する。

結 果

A. 今日までの家畜慣行の変遷についての聞き取り調査

牧畜民が家畜に対して見出してきた象徴的意味合いの定常性と形式上の変化については、以下の3つの時代区分に留意し、それぞれの時期における家畜の位置付けとツェタル慣行の変遷状況をインタビューによって調べた。

(1) 中国共産党による集団化以前（～1957年）

当時の放牧は夏・秋・冬の年3回、キャンプ地の移動を行っていた。冬のキャンプ地以外、場所は固定されていなかった。今よりも人口ははるかに希少だったが、放牧される家畜の数は今とほとんど変わっていない。家畜は「ルコル」（5～10世帯からなる父系リネージ集団）単位で放牧していて、特に冬のキャンプ地では、オオカミや暴雪による家畜の損失を防ぐため、複数のテントで家畜を囲い込んで管理していた。このため、ツェタルもルコル単位で行われていた。当時は1週間に羊を一頭、ひと月にヤクを二頭屠って、肉に依存した生活を送っていたので、ツェタルはこの殺生の罪をあがなう意味で、寺院のラマや土地の神仏に対して盛んに捧げられた。

(2) 集団化以降文革終息まで（1958年～70年代）

58年の武装鎮圧後、共産党政府は人民公社をスタートさせた。家畜はすべて生産大隊の所有となり、各個人には放牧や搾乳などの作業が労務として割り当てられた。家畜も「労働点数」という数値に置き換えられ、損失がでると処罰された。この時期、宗教活動は停止し、僧侶はすべて還俗させられた。人々は密告を恐れて念仏を唱えることも、数珠をもつこともしなくなった。だがこうした宗教的慣習の空白状況の中でも、牧畜民の最も

身近な日々の糧である家畜に対しては、元僧侶だった人にこっそりと加持をしてもらって、密かにツェタルを認知し、飼っている者だけにわかる形で保護していた。どんなに迷信として排撃されても、畜群の中にツェタルが一匹もいない状態は心理的に嫌だった。日々放牧する土地の神々に対する敬意を示すうえでも、また病気や自然災害によるマイナスを防ぐためにも、群れの中にツェタルを置いておくことは安心の種だった。

(3) 現在の市場経済体制期（1980年代以降）

人民公社の解体によって、生産大隊の所有だった家畜と牧草地は、各世帯の人口に応じて再分配された。これ以降、僧院が徐々に活動再開すると共に、ツェタルの行事も大々的に復活した。ツェタルの作成プロセスは昔と変わらない。僧侶に相談して捧げる対象を決め、加持祈禱を行い、印をつけて群に放つ。ただ、最近は外の社会とのつながりが濃くなったので、ツェタルもヤクや羊のような家畜だけでなく、鶏や魚でも代用されるようになった⁴⁾。僧院では病気治しや故人の供養のためにより多くのツェタルをすることを勧めており、占いの結果次第で時に100匹を超えるツェタルが必要になるときもある⁵⁾。そういうときには親戚に頼んでツェタルの数合わせを負担してもらったり、鶏や魚で代用したりできる。

B. 今日の市場経済状況下におけるツェタル慣行の特徴

高齢者への聞き取りから判明した集団化以前の畜群全体に占めるツェタルの割合は多く見積もっても1割前後である。他方、現在の各世帯の畜群に占めるツェタルの割合は2割を超えていることが、C村の12世帯の畜群構成の調査から明らかになった。このような世帯単位のツェタル割合の増加について、以下の2点から検討を進めた。

(1) 市場経済への包摂

改革開放以降とそれまでの最も大きな違いは、放牧地が世帯単位で区画化され、土地・家畜ともに個人所有の意識が進んだことである。90年代後半に一気に普及したフェンスによる牧草地の囲い込みと、この地域の草原で採れる冬虫夏草（英語名：Caterpillar Fungus）の市場価格の高騰は、中国併合以前に常態であったルコル単位の共同管理を完全に無効化し、世帯ごとの家計管理が急速に確立した。他方で、家畜がツェタル化される契機は、世帯構成員の病気や死去、不殺生の実践といった革命期以前から変わらない定常的な理由のほか、子供の学校進学や公務員試験の成功、固定家屋の建設、海外

渡航の無事やダライラマの長寿祈願、地域のラマが主宰する不殺生の祈願大祭など、現代牧畜民の社会的活動領域の拡大に伴う多種多様な背景から行われるようになってきている。また、冬虫夏草による現金収入の大幅な増大は、家畜を第一の生計手段としない家内経済を成立させており、個別世帯の畜群に占めるツェタルの割合を無制限に増加させ、結果売却できない家畜が相当数に達してしまっても、家計のやりくりには響かないという状況が考え合わされる。

(2) 宗教アイデンティティの復興と増幅

当地では、2008年3月にピークに達した大規模な民族主義運動の活性化以降、官憲との衝突の犠牲となった人々や、現在も継続されている「焼身抗議」の実践者を供養・追悼するため、不殺生の誓いを立て、家畜を金銭のために売買することを止め、肉食を絶って戒律の遵守にいそしむ人々が増えている。チベット仏教ではもともと「セムチェン」(sems can=有情)の文脈で、人間と動物を分け隔てず、この世に等しく命を授かった存在として平等に認識する枠組みが存在するが、国外にいるダライラマの民族運動の方針⁶⁾とも相まって、「不殺生」の実践に重きを置く今日の宗教／政治状況と上述の経済状況は、牧畜民が家畜を“交換経済における消費財”としての「シグソク」(phyugs zog=家畜)としてではなく、自らと同じ命の価値を宿した「セムチェン」として扱うべき局面を社会的に増大させている。こうした文脈の中では、慈悲心と利他行為という仏教の中心思想を体現するツェタルの実践は、自らが共鳴する仏教思想を社会的に具現化するうえでひとつの重要な焦点となるものである。このため、今日の牧畜社会では先のA) 末尾で触れたように、僧院社会と一般社会が呼応するような形で、加速度的にツェタルの量的な増加が引き起こされている。筆者が調査した12世帯でも、自らの世帯で行ったツェタル以外に、親戚や友人から依頼されて割り前を分担した結果生じたツェタルが広く存在する。

全体のまとめ

以上みてきたツェタル慣行をめぐる通時的象徴と現在状況とをつなげて考えることでまとめたい。

まず、A) 1950年代から今日までの家畜慣行の実践上の形式変動と質的な意味合いについては、50年代の併合期から革命期を経て現在の市場経済体制下にいたるまでの間、家畜は私有と公有の間を揺れ動き、それに伴ってツェタルの実践様式も大きく変動してきたが、その内

側に見られる「セムチェン」としての観念把握は定性的に維持されてきたことが判明した。牧畜民をプロレタリアートに、家畜を労働点数に変換する革命期のイデオロム操作は家畜を純粋な「シグソク」と見なすことを人々に強要し、また形式的にも一切の儀礼的要素は「迷信」として社会から排除された。しかしそうした極限状況においても、家畜をセムチェンへと変換する非明示的な思考様式は温存され、その基層に横たわる牧畜民と家畜との象徴的なきずなが断たれることはなかった。

翻ってB) で示した改革開放期には、「宗教アイデンティティの復興」と「市場経済への包摂」という2つの社会局面によって、シグソクをセムチェンに変換する基層的な紐帯は強化され、それに伴ってツェタルの絶対数は大幅に増加した。総じてみれば、これは家畜を介して仏教アイデンティティが強化されるという社会現象であり、ツェタルは今日の宗教／政治状況と一般社会をつなぐ媒介の役割を果たしていると言える。

最後に、加速度的に移転が進められている今日の牧畜社会における定住後の生活支援という最初の問題に立ち返るならば、人々の生活様式の多様化に伴って、そこで生じる問題への対処法をツェタルの実践へと収斂させる牧畜民の象徴的志向性は今後ますます強まると予想される。それゆえに、今後の中国辺境社会でより実り多いコミュニティ支援の方策を組み立てるうえで、本研究で示された「家畜と人間の基層的關係の持続性」という牧畜民の心性に内在する価値観を考慮に入れて全体の制度設計を考えていくことが重要である。このことは、劇的に変動する中国辺境の生活社会において、少数者が真に住みやすい環境を整えるうえで、ひとつの重要な指針を提供しうるものである。

謝 辞

末筆ながら、調査期間全般にわたって終始変わらぬ暖かいご支援を賜った公益財団法人三島海雲記念財団職員の方々へ心より感謝申し上げます。本支援により、チベット牧畜民の家畜認識の象徴性をめぐる研究課題に重要な糸口を付けることができました。ありがとうございました。

註および引用・参考文献

- 1) これらの研究では、移住先に畜舎を併設することで家畜との関係を部分的に温存することや、牧畜民の“文化的背景”に配慮した畜産加工業への主体的な参画を促していくことの重要性が論じられている。都市生活への不適

- 応をふまえたこれらの“半同化論”的軌道修正案は中国の論文検索サイトで数多く見つかるが、ここでは日本語で読めるこの種の論考として韓霖 2010「中国における遊牧民の定住化に関する考察—青海省におけるチベット族の事例を中心として」『地域政策科学研究』(7) pp. 105-125.を挙げておく。
- 2) 海外の著名人権団体によって刊行され、中国当局の強烈な反発を招いた以下の2つのレポートは、欧米社会がこの移住政策を既存の「チベット問題」と軌を一にした民族問題として捉えていることを如実に示している。Human Rights Watch. 2007. 'No One Has the Liberty to Refuse': Tibetan Herders Forcibly Relocated in Gansu, Qinghai, Sichuan, and the Tibet Autonomous Region. New York, NY: Human Rights Watch, Human Rights Watch. 2013. 'They Say We Should Be Grateful': Mass Rehousing and Relocation in Tibetan Areas of China. New York, NY: Human Rights Watch.
 - 3) C村でも移住政策が推進されているが、これまでのところこの村で移住を完了したのは全世帯中11%にとどまっている。
 - 4) このカテゴリーは厳密にはツェタルではなく、ソクル(srog bsu)と呼ばれる。対価を払ってよそから贖った命、という意味である。参考) David Holler, The Ritual of Freeing Lives, In *Tibet, Past and Present: Religion and secular culture in Tibet*, International Association for Tibetan Studies, Henk Blezer, (ed.), Brill, 2002, pp. 207-226, シンジルト 2012「家畜の個性性再考：河南蒙旗におけるツェタル実践」『日本文化人類学』76(4) 439-462.
 - 5) 例えばC村のある世帯では、64歳になる母親が難しい肺病を患った際、その快癒を祈願するツェタルの実行をラマに伺ったところ、その母親の年齢と同じ数のツェタルが必要であることを告げられた。しかしその世帯でまかなえるツェタルは30頭に満たなかったため、残りを親戚に分担してもらい、何とか帳尻を合わせたという。
 - 6) 現在のチベット亡命政府の活動方針は、独立放棄と不殺生思想に基づく領土問題の平和的解決を訴えたダライラマによる「五項目の和平提案」(1988年)に基づいている。